

秀歌三十首十今年の収穫

高山邦男

友と来て父と釣りせし山川に七十年ぶりに岩魚を釣れり
十月号・小笠原政雄

保護者欄いつも書くのは夫の名自分の名より
伊藤亜佐里

競りの輪を少し離れて熱を抜くマスクの右を
鎌田 由紀

たらりと下げて
吉川七菜子

「ニーハオ」と掛け間違ひの留守電は恋か仕事か行方を知らず
十一月号・鷺沼あかね

ありがたき雇用調整助成金たれもやめずに明日給料日
日高 尚子

焼き鳥の匂いを風が背負ってきて不織布マスクを易々抜ける
志水千登世

核兵器禁止条約に批准しぬクリストファー・ネービスといふ国
辻尾 修

真つ暗な闇ばかり見てみし蟬は青が好きだとあふ向けに逝く
十二月号・間宮 清夫

傘マーク並ぶ天気図見るように見ており隣の上司の機嫌
一月号・倉石 理恵

栗もらいありがとうまでの数秒間顔が笑つてない笑えわらえ
渡辺 栄子

この棟の秋立つときのしるしなるそこかしこゆ立つ噓うそせる音
坂口 弘

なんとなく先に座るほど多く権利を得るらしい昼のラウンジ
木下 佳恵

透きとほる記憶をたぐる眼差しにわれを見つめる夫にたぢろぐ
二月号・田川喜美子

六年生は行くはずだった花巻の賢治の詩を読む「雨ニモマケズ」
蓬田 真弓

配役を友人知人で埋めゆけば我は仇敵となる時代劇
片山佳代子

札幌にささら電車が走り出し残りの刑期二月を切る
十亀 弘史

深ぶかと青き空なりあの青はわれのみなもと選りゆく場所
三月号・金 有美

李田を李とふ姓に戻した友と交はず二十年越しのグラスよ「乾杯」
福崎 享子

鍵を持つたしがいづつかやつてきて扉を開けてくれるだらうか
服部 崇

Zoomにもエンドロールがあればいい突然消える顔顔顔
四月号・関沢由紀子

ひとつずつ繫げば星座に見えてくるほくろの多き子の背を洗う
五月号・中川 弘子

裁断の都度「シユワツチ!!」と声を出す若き職工忘れ難しも
丸山 稔

キャラ物は子供の盗みの誘発の懸念のためにNGという
六月号・奥村 知世